

「そらお竹はん違ふし、子供は養育そだてておかなあかんし、子寶と云ふて、野にも山にも子は産み落せ、子寶で咲く老の花、と云ふ事が有る、今に子供が大きう成つて見なはれ、年寄つてから樂が出来るやないか、其の證據に奥のお龍はんみなはれ、先方じやうのおくしさんが親孝行やので、お龍はん結構やし」
 「眞まことにそうやしなあ、其れはそうと彼のおくしさん、此頃髪結さんの弟子に行つてやねんとな……」
 「ハア、彼んな温順おんじゆんい正直で親孝行な娘やので、未だ其處まで往かんのやが、今度、自前にして貰ふたんやと」

「それに引替へお龍はん、此頃なんや若い男が出来てるのやそうな、ナアお松さん姐はん」

「ハアそれが何や、博勞とか、馬方はんやとかやと」

「マア馬子はんか」

二人が話をして居る處へ歸へて來たのが、此の噂の主人公で、お龍はん。緋の單物を着て、風呂行き道具を持つて、額の汗を手拭で拭きながら歸へて來ました。

「マアお龍はんお風呂だつか」

「ハアあんまり暑いので汗を流してきましたんや」

「マア奇麗に髪を結ふて」

「イエおくしに一寸撫で付けて置いてと言ふたら、お母さん同じ事やで結ふたげると言ふて今の先、

結ふて呉れましたんや」

「左様か一遍其方むいてみなはれ、マア恰好好う結ふておます事わいなあ」

「お龍さん、甚い宣い緋を着てなはるなあ」

「これだつか二十錢で質に置いておましたんやが出して來ましたんや」

「お龍はんの前やが質ほどつまらん物はおまへんな、此方から品物を持つて行つて金を借るのに、へイコラ〜と頭を下げて唯でも金を借る様に、出す時には利子を持つて行かんならんし、妾等質に置くのやつたら紙屑屋に賣つて仕舞ふほうに氣が利いてると思ふは」

「お松さんそら違ふし、質屋は貧乏人に無けならんもんやし、金の入る時には品物を持つて行つて金を借るし、又着物の慾しい時にはお金を持つて居たら出して呉れるが賣つて仕舞ふたら入る時に難儀をせんならん、そやよつてに質屋は大事にして置かんといかんねし」

「お龍はん貴女甚い質屋の肩を持ちなあるねな、ア、解つた此頃若い男はんが出来てるそうな、聞けば馬方はんやと言ふ事やが、小金を貯めて質屋でもする氣やしな、此の道路を肩で風を切つて、びんしゃん〜と尾を振り廻すつもりやねな」

「お松さん甚い妙な物の言ひよをしなアるな、妾の男が馬方であろうと、博勞であろうと、ほつといとくなあれ、別に貴女のお世話になれしまへんで」